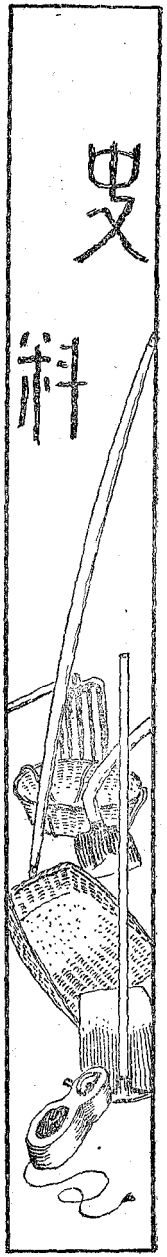



# 東海道行脚〔十一〕

田中好

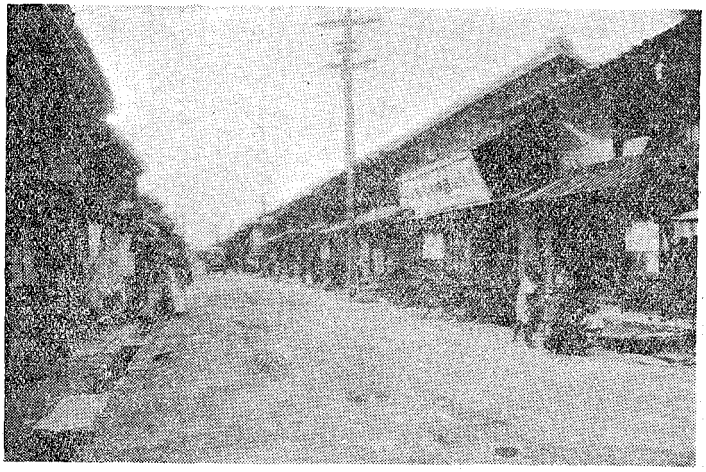
## 御油

その顔でとめだてなさば宿の名の
御油るされいと逃て行ばや

彌次喜多は、此處御油も失敬して通り過ぎたが、庚子道の記は、御油の宿に宵すがりて著きぬ、こゝには女どものあまたありて、たはれ男の心とるけしきなり。と言つて遊女の全盛を語つてゐる。夫れ程、昔は遊女や飯盛女が澤山に居て旅する人を慰めたと言ふことぢや、明治五年に娼妓解放令が出たときは町の運命にかゝると言つて飯盛女繼續願を縣令に出した位に、遊女の勢で活きてゐた町がが、明治の御代に爲つて鐵道は海岸の方へ敷かれて御油を失敬したから夫れ以後は廢れるまゝにしてある淋しい町だ、今も町家の四五軒に階上階下頗る念入りの建物を見受けるが、夫れは昔の遊女屋の遺物であらう。町の街道も德川時代のまゝの三間幅で尠しも改まつてはゐない。

此處を御油と言ふやうに爲つたのは、持統帝のとき、赤坂宮路山へ行幸された其の折に、此町から油を奉つたので御油町と爲つたと傳えられてゐる、が併し眞否の程は保證が出來ない、慶長六年正月駒引御朱印の御傳馬免狀が町役場に保存されてゐると言ふことたから慶長の初年に宿驛と爲つたのであらう。だから德川以前の旅日記は此處御油を物語らないのも道理だ。

町を出ると彌次さんや喜多さんが狐どつこをして旅した狐屋敷が控えてゐる、此處が昔の御油の城址と言はれてゐるが、二畝歩に過ぎない籔があるばかりで、旅人に諧謔の念を與えない。



今の御油

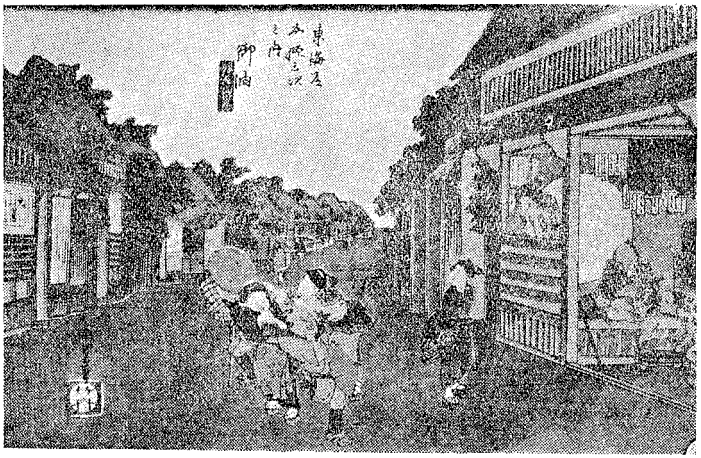
## 赤坂

夏の月ごゆよりいで丶赤坂や。

芭蕉をしてこう歌はしめた赤坂、今も村社關川神社の境內に句標が立てられてゐる。宿驛として物語るだけの歷史もないやうだが、鎌倉時代から以降の旅日記は、大江定基が此處赤坂長者の女に愛着し忽ち其の遠逝にあつて、發心入道した昔話を物語らないものがない位に囃し立て丶ゐる、皈家日記の女主人公は、御油より赤坂に行く、客亭いとにぎはしく立並びて、家々の女ども旅人を呼びいれとゞむる聲喧しく、小田の蛙の夕暮になく心地す。と評してゐる位だから矢張り此處も御油と同じや

うに遊女が發展したところだろう、併し德川初期に旅した例の和蘭人エンケルベルト、ケムフェルの紀行文は。赤坂の家々の大なること、我等が江戸旅行の中に於て見たるものゝ中にて第一位に在り、江戸の家さへ及ばざる程なりき。と言つてゐる、實際に夫れがあつたとすりや當時から隨分發達して居た宿であらう、今でも戸數三百と言はれてケムフェルの述べたと同じやうに北國式の家屋が殘つてゐる。

町を出ると相變らない惡路で旅人は惱まされてゐる、幅は三四間を保つてゐるが路面が壞はされてゐて旅する人に昔の情緒を起さしめない、額田郡本宿村の法勝寺も街道の傍にあつて旅人に古きを敎えてゐるやうだが、惡路に惱まされたお蔭で參觀する氣も起らない。矢張り觀光地に通ずる道でも之と同じやうに足場が良く無けりや旅心を起さしめないものぢや。



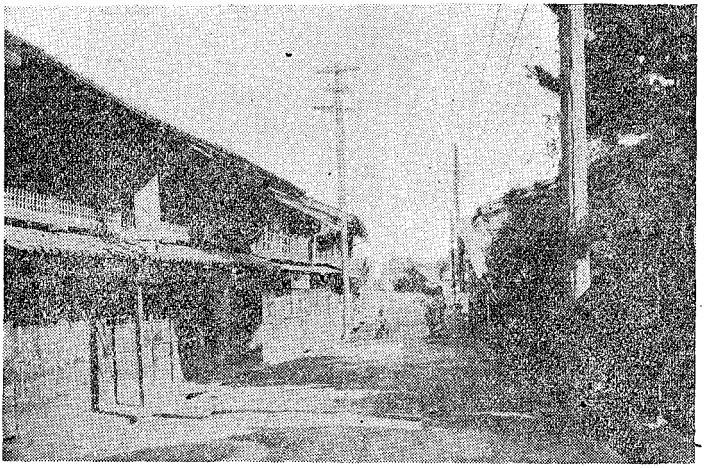
昔の御油

街道を左に幅九尺の道がある夫れを行くと山中村にある山綱の部落、今では戸數五十にも足らない程の一寒村だが、延喜式に定められた山綱驛ぢやと傳えられてゐる、併し安永二年に寫しとつたと言はれてゐる宮路山古道路圖に依ると、今の東海道が音羽川に沿ふてゐるのに、古道圖は態と宮路山に這入つてゐることや、東鑑が文治六年庚戌十二月の條に、十九日己亥入夜令宿宮地山中給。と傳えてゐることや、更級日記が、宮路山といふ所越ゆるほど、十月晦日なるに紅葉ちらでさかりなり。と言つ

てゐることや、東關紀行やらが宮路山を語つてゐる數々の旅日記を綜合すると、今の東海道は往古から室町時代までの東海道ではない、赤坂舊記が言つてゐるやうに、應永二十年將軍義持下た道を開かると傳へてゐるから今の街道は其の頃の築造であらう。

## 藤川

徳川時代に宿驛として名を得た藤川驛、今の藤川村、前に物語つた延喜式の山綱驛が、此處へ移つたのぢや、イヤ夫れは赤坂驛へ移つたのぢやと、區々に言はれてゐるやうに、藤川驛の起源は明かではない。併し三河堤には慶長五年八月十一日、岸田伯耆守藤川問屋三重郎を本陣として騒動したことを物語つて、夫れを藤川驛騒動と言つてゐるから夫れ以前に矢張り藤川驛が成立つてゐたことであろう。

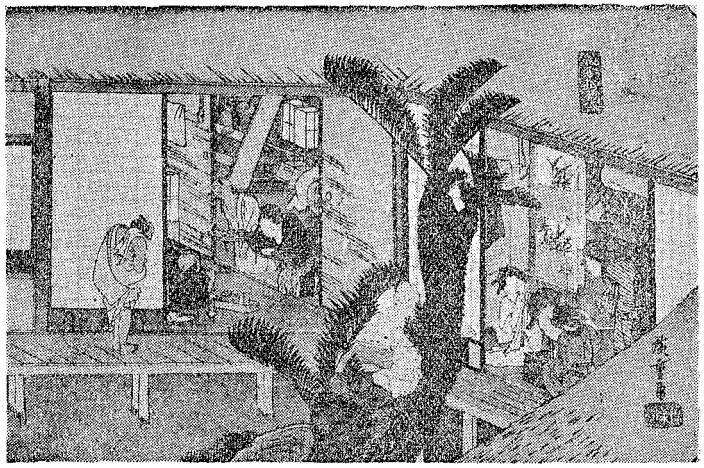


今の赤坂

今は淋しい村落で昔の面影を殘してゐないが、街道は四間幅に仕立てられ比較的立派なものだ、驛の番所は今の小學校のある所に在つた廣重も其處を筆にしたのであらう。部落を出ると又々愛電との平面交叉だ癪だが出來上つたものは今更仕方が無いと言ふ人もあるから眼を掩ふて通らうとするが矢張り危險ぢや。

此處から先きの海道は、大平川や矢作川の水のお蔭で隨分變つたものらしい、延喜式には鳥補驛が指定されてゐる、併し夫れが鳥捕の誤寫であることは後世歴史家が筆を揃えて言つてゐるのだから私も夫れには反

對はしない併し鳥捕驛（ワシトリ）であつたにしても今は何れの部落が宿驛であつたのかは未だ解決してゐない、地名辭典は、渡、今本鄕村の大字とす、矢作村の南端にして本東岸は額田郡三島村六名とす、此渡津は古の鷲捕矢作の驛路にあたれば地名もワタリと言へる也。と言つてゐる、何でも平安朝時代の街道は、今の岡崎を通らないで矢作川の右岸鳥捕（ワシトリ）驛かち明大寺（今は岡崎市に編入された）を通つてゐたらしい、岡崎が盛大になつてから東海道も其の方に造り變えられたのぢやが、彌次喜多の連中は、天正十一年織田氏と今川氏とが戰つてから名を知られた小豆坂を過ぎ岡の江遊寺を打越て大平川に出てゐる、小豆坂は岡崎村羽根にあるのだから當時の



昔の赤坂

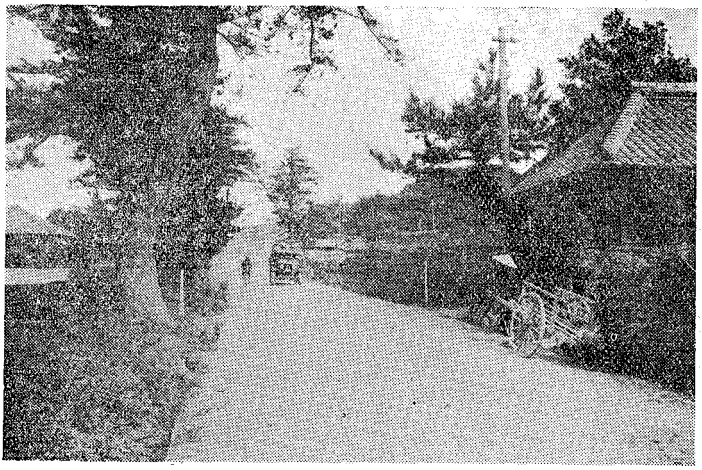
東海道は或はそちらへ廻つてゐたものであらう、だから私も地名辭典の說明に贊成したい、詰り此邊の東海道は三度變更されたものぢや。

大平川に架かつてゐる大平橋、今の橋は舊橋よりは下流の方に架けられてゐるが、舊橋の橋詰には德川の盛時を物語る松竝木が新橋を羨ましそうに一本立殘つてゐる、だから德川時代の東街道は態々小豆坂を採つて太平川の左岸に出たことが判るであらう、竝木が羨んでゐる大平橋、橋の中央は近代式の混凝土で作られてゐるが、其の前後は木橋ぢや、旅する人は變な工法に驚かされてゐるが譯を聞けば、成る程近代役人のすることぢやと更に驚かされる、夫れと言ふのは大正の時代に大平川が汎濫して橋

の中央が落ちた、落ちた部分だけを災害復舊工事として政府が補助したから此樣なものに仕上げたと言ふことぢや。

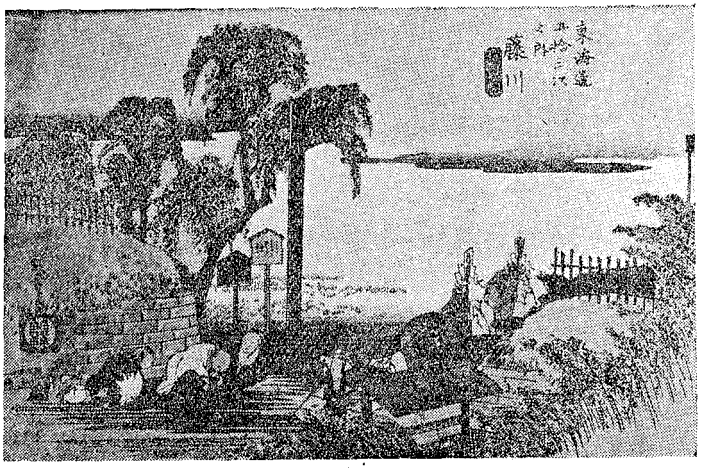
## 岡崎

大八洲遊記は、岡崎居民一萬三千繁盛出豐橋上、維新後置額田縣、治本國、九年始、屬愛知縣、此土東照公發跡地、風俗淳厚、非駿遠之比云故城以當海道中央、近毀以爲官道、道傍隍塹壘址、猶有存者。と言つてゐるが、昔は菅生と言ふ一寒村で、東海道の古きを尋ねてゐる私には餘り興味がない、と言ふのは王朝乃至は戰國時代の東海道の旅には此處豐橋には無關心であつたからだ、延喜式に定められた鳥捕驛(ワントリ)が、矢作川の對岸にある渡であつて今でこそ岡崎市域に編入されてゐるが明大寺が東海道の通路に方つてゐたからだ、鎌倉時代の旅日記、東關紀行や十六夜日記でも何事も書き留めてゐない、唯だ海道記が矢矧と行ふとこゝを出でて宮路山越え過ぐる程に赤坂といふ宿ありと言つて此處岡崎のことを書かないで其のお隣りの矢作を書いて居るのは其の證據だ、其の後東海道の道筋は矢作川のお蔭で路線を換えて今の岡崎市祐金町昔の榎町邊に移つてゐた。夫れを東照公發生の地と言ふ勢でもあるまいが、慶長六年丑正月に御傳馬の御免許が下がつて、今の岡崎を生み始めたものだ、天和年代の皈家日記は、この國の御城うるはしく見ゆ驛亭長くつゞきて町たてわたしたる、あき物する家どもゝさまざ



今の藤川

ま行きかふ人の目とゞむべき物どもかざり置きて、いみじう賑しきあたりなり。と言つて當時の繁盛振りを物語つてゐる、洒落者の彌次さんでさえも、爰は東海に名たゝる一勝地にて殊に賑しく、兩側の茶屋いづれも綺麗に見へたり。と賞めてゐる。壬戌羇旅漫錄は、茶屋に居た出女、今で言ふと娼婦のことを言つて、をか崎の妓は、齒を染むることならざりしが、近年ゆるされて齒を染むるなり、芝居などへも見物にゆくことならざりしが、これも今はゆるされたり、妓の風俗吉田に異ることなし妓夜行するときは夏はふるき浴衣、冬は布子などをはをりて歩くなり、もと絹布を著べきものならぬゆゑかくのごとし、但諸侯の旅館に參る時のみ、は




昔の藤川

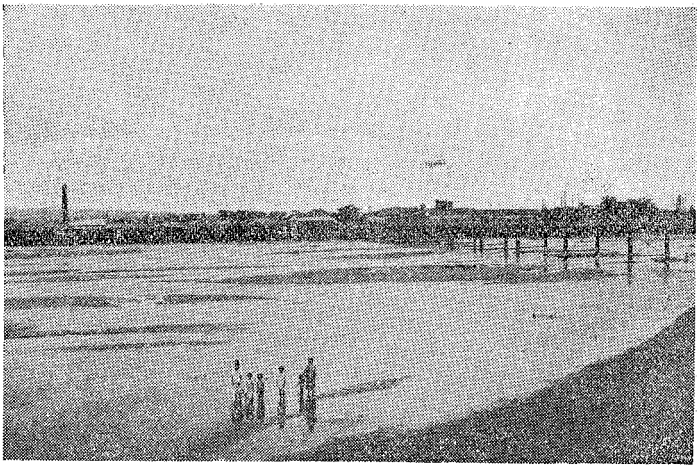
れて美服にて夜行す。と言つてゐる繁盛になつたのは何れもお城を築いて呉れたお蔭であらう。

今は戸數一萬四千と言はれてゐるが、私の旅する東海道は屈曲が多いのと幅が狹いのとで自動車の通行は到底出來ないと言つて可い位だ、だから舊街道を捨てて康生町から町の裏を通つて欠町まで幅十二間に改築することにして其の過半は出來上がつてゐる、併し前後の街道が狹いのに此處だけが廣いのは變なものだ、鐵道東海道線は、不幸にも岡崎の中心を離れたところを通つたので、市勢の發展を鈍らしてゐるのは、德川

以前の東海道が岡崎を通つて呉れなかつたのと同じだ。

○

直線道路で街を出ると矢作橋だ、近代式の鐵橋で長さ百五十間五尺、幅三間半、大正二年九月に竣功したものだが架橋の始めに就ては色々に囃立てられてゐる、舊事記に依ると、推古天皇二十年百濟の皈化人に三河八匠長橋を架けさせたと言つてゐるが、是は眉唾ものだ、夫れと言ふのは承和二年の大政官府には、豐川と同しやうに從來二艘でやつてゐた渡船を二艘殖やして四艘にすると言つてゐるから夫れ以前に橋が在つたことを想像することが出來ないからだ、平家物語は、養和元年三月美濃の國の目代の申告で源氏の擧兵を聞き平家が討手を差し向けたことを傳え、十郎藏人行家は引き退き、三河の國に打越えて、矢矧川の橋を引き搔楯かいて待ちかけたり、平家やがて續いて攻め給へは、そこをも遂に攻め落されぬ。と言つてゐるから矢張り鎌倉時代に橋を架けたものであらうが、原始河川の矢作川だもの水は思ふまゝに幾條にも分流してゐたであらうから、此流に橋を架け彼所の流には渡船したであらう、併し矢作川が整理されたのは西郷彈正左衞門が岡崎城を築いたときであると言はれてゐるから矢張り其の頃から橋らしい橋が出來たのであらう。元和年代の丙辰紀行は江戸より京までの間に大橋四あり、武藏の六郷、三河の吉田、矢矧、近江の勢多なり、ひとり矢矧のみ土橋なれば洪水によりて絶る事もあり、此比新に板橋となりけるにや、爰にしも誰が周處か三害をやめて、留候が

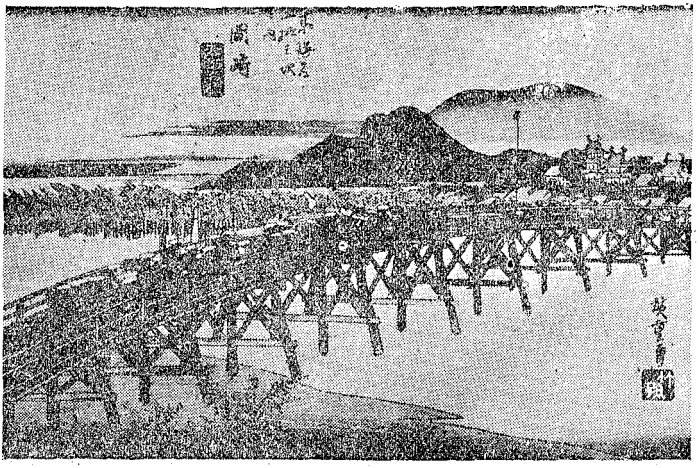


今の岡崎

一編を傳むや。と言つてゐるが、寛永十一年七月家光將軍上洛の際に從來の土橋を廢止して長さ二百八間、欄杆擬寶珠附きの板橋を架けたと言はれてゐる。

○

橋を渡れば矢作の町だ、戸數二千と稱せられ、町の體裁やら勢力は岡崎に劣つてゐない、市町村の合併の氣運が向いたら大自然の矢作川を突發して岡崎に合併さるゝ運命を持つてゐる。町内の渡が延喜式の宿驛だから岡崎宿よりは先輩で、矢矧の宿と囃されるやうに爲つたのは鎌倉時代からだ、平宗盛が壇浦に捕えられて鎌倉に送らるゝときにも、矢矧宿をも打過て宮路山を越えぬれば赤坂の宿と聞えけり。と源平盛衰記は語つてゐる



昔の岡崎

吾妻鑑も、嘉禎四年二月、將軍頼經上洛の條に、七日遠州橋本驛、八日着御豐河宿及深更風雨甚、九日霽矢作宿入御于足利左馬頭亭、依去夜風雨洲股過近兩河浮橋流損。と傳え鎌倉時代に全盛を極めたものぢや。夫れが戰國時代から漸次凋落して岡崎に勢力を奪はれ、德川時代には誰も顧みて呉れない、此處を旅する人は唯だ昔の盛時を物語つて行くだけぢや。

町を出ると地勢のお蔭で道は平坦ぢやが、路面の惡いことはお話にならぬ位だ、貨物自動車が通るお蔭で壞されるので此處の街道の維持は不可能ぢやと諦められてゐる、路面の凹に水が溜つたとき、月でも出るものなら、何も信州にまで旅せずとも此處東海

道で田毎の月を眺めることが出來る、とは俳諧師宮島愛知縣土木部長の所感だもの耐まつたものではない。

○

尾崎や大濱茶屋や今と言ふ部落を通つて來迎寺の部落にくると、右に無量寺にお參りする道しるべが建てられてゐる、無量寺、夫れは平安朝時代の人氣者、在原業平朝臣が伊勢物語に。

其の男身を益なき者に思ひ做て、京には在じ、東の方に住べき國探めにとて行けり、舊より友とする人一人二人して往けり、道知る人もなくて迷ひ往けり、三河國八橋といふ所に到りぬ、其處を八橋といひけるは、水行く河の蜘蛛手なれば橋を八つ渡せるによりてなん、八橋と言ける、其の澤の傍の樹蔭に下り居て、糒食けり、その澤に燕子花甚雅致に咲たり、其を見て或人の言く、かきつばたといふ五文字を句の上に据て旅の心を詠めと言ければ詠る。から衣きつゝ馴にしつましあればはる〳〵來ぬるたびをしぞ思ふ。と詠りければ皆人糒の上に涙落して潤びにけり。

と殘し傳えた三河國八橋のある處だ。東海道を旅する人の誰にでも言ひ囃されてゐるが、寛仁時代の旅人更級日記の主人公でさえ、八橋は名のみして橋のかたもなく何の見處もなし。と言つてゐる。東關紀行も亦、行き〳〵て三河國八橋のわたりを見れば、在原業平、杜若の歌よみたりけるに、皆人かれいひの上に涙落しける所よと思ひ出でられて、其のあたりを見れども、彼の草と思しきものは無くて稻のみぞ多く見ゆる。と言つてゐる、夫れに貞應の海道記が、池鯉鮒が馬場を過ぎて、數里の野原に一兩の橋を名づけて八橋といふ、砂に睡る鴛鴦は夏を辭し去り、水にたてたる杜若は時を迎へて開きたり。と歷史でも小說でもない業平の伊勢物語に因んで嘘をまことらしく言つてゐるのは滑稽ぢや。地元の知立町誌の載せてゐる八橋の說明を拜借すると。

八橋、往古儒街道の要區に當り野路の宿と稱す、此の西北は南海の入江にして、このほとりを入江浦と稱せりと

か、此の入江浦の地は驛路の要衝なりしと雖、渡船の便なく又橋梁とてもなかりしかば、旅人は皆淺瀨を探りて徒渉せしものなりと云ふ。然れば老弱の男女は過て湖水に溺れしものも亦多かりき、爰に於て里人之を悲嘆し、無量壽寺の觀音大師に祈誓を込め、この入江に橋を架け危難を避け給へと祈願しければ、誠に大師の御利生空しからずして、或時幾多の架橋材料此の入江の波に打ち寄せてけり、依て里人歡喜し、此橋材を採り協力して此の入江の淺瀨を探り、八つの違ひ橋を架け竣りぬ、干時承知九年五月なり、降て醍醐天皇延喜二年五月十二日清行公奉勅此の橋を見聞せらる、此時橋形を以て橋名とし八橋と稱せらる、是より野路宿を更めて八橋宿と稱せり、其後平針街道開鑿せられ又慶長以後東海道新開せられ、驛次は廢せられ爰に村落となり八橋村と稱す、明治二十二年牛橋村に屬す。

と言つてゐる、併し橋を架けたのを承知九年と記したのが承和の誤でありとすれば伊勢物語や更級日記に言ひはやしたのは無理はないが、延喜の時代に八橋と命名したとすれば夫れ以前に八橋を囃し立てる道理はない筈ぢや、今人も八橋村と駒場村の間に流れてゐる遇妻川の邊に古い松の五六本生え茂つてゐる一推丘の芝生をさして古杜若のあつた跡だと言つてゐる、是も眉唾ものぢや。併し八橋があつたとすれば、原始時代の矢作川の支流に架かつてゐたが、加茂眞淵が、水行く川にあらず水せく川の誤で其の堰きたる水を田の養水にとて八方へ小川を堀りてこれに橋を架したり、此故にくも手とは曰へり。と評したのも無理はない、今人が八橋と言つてゐる無量寺の庭園には成る程、長さ一間、巾三尺位の八つの小さな橋が架けられ、其の堀には杜若も植えられて昔の物語を想像するやうに拵えてゐる、併し是等は今人のいたずらで、私も彌次さんが素見したやうに、八ツ橋の古跡をよむも我々が、及ばぬ耻をかきつばたなれ。と言ふに贊成して、古人の傳えた八橋を貶して私の旅を急ぐことにしやう。

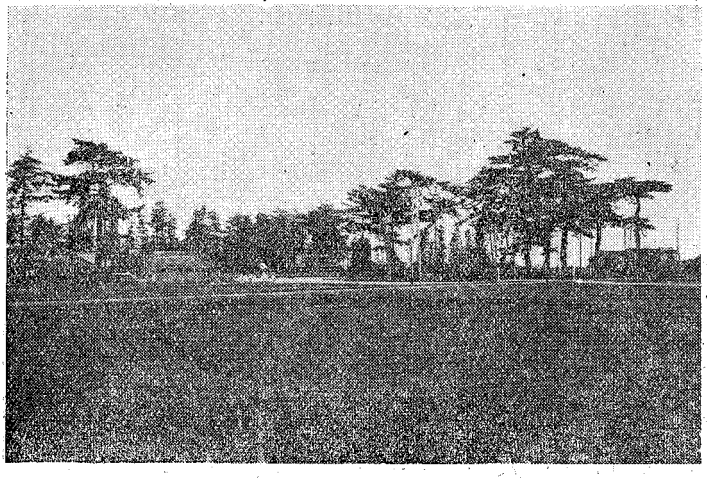
知立の町へ這入る手前の東海道の兩側には巾一間半位な

附け道がある、今であつたら直ぐ歩道と解釋されるところだが、徳川時代には左樣なものは無かつた筈だ、諸侯道中行列に遭つた平民共が夫れを回避する爲に設けられた道か、後世史家に研究の種を蒔いてゐる。

## 知立

此里の名に負ひたりとおさかなの料理をしたる池の鯉鮒

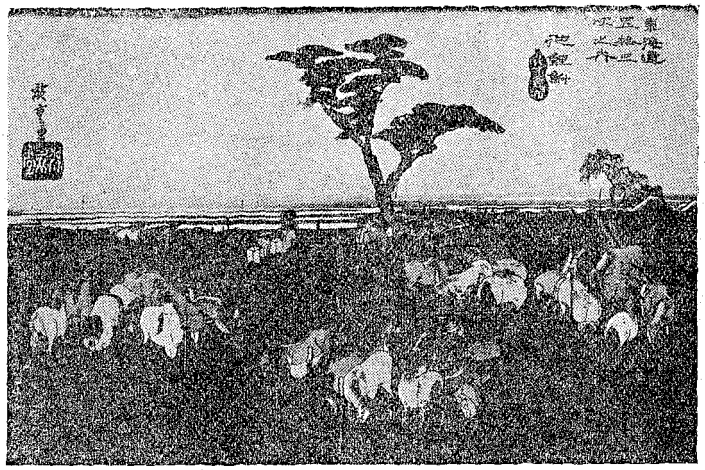
藤原光廣が曙記で詠んだ狂歌だが其の昔は知理生とも知立とも言つたそうぢや、其の勢でもあるまいか今も鯉や鮒を料理して呉れる家は無いと言ふことだ、いつの時代に此處知立が宿驛と爲つたかは餘り判然してゐないが、徳川以前には東海道は此處を通つてゐなかつたから宿驛であらう筈はない、夫れと言ふのは前に貶しておいた八橋の眞否は別としても平安朝時代の旅人が、其の處を通つたものとすりや、當時の東海道は今のとは違ふ譯だからだ、延喜式の驛に尾張國の雨村驛と言ふのが定められてゐる、其の雨村驛が兩村驛であつたことは私が證明するまでもない定説であつて、其の兩村驛と言ふのが今の豐明村沓掛の地である、であるから徳川以前の東海道は、今のよりは北方に在つたものであつて、沓掛の兩村驛を出て八橋を通つて先きに言つた鳥捕驛に出たものた、此ことは寛仁年間の更級日記が、二村山、いまの鳴海町二村山中に庵を造つて寢たことを傳えてゐることや、海道記が宮道二村の山中を賒に過ぎて……山



今の知立

中に堺川あり、身は河上に浮んでひとり渡れども、影はみなそこに沈みて我とふたり行く、かくて三河國にいたりぬ。と言つてゐることに依つて明かぢや。

神武創業錄に、天正十年四月十八日信長公池鯉鮒に至り給ふ云々。と言つたり、歸家日記が池鯉鮒を通過したことを物語つたりしてゐるから宿驛であつたとは言へない、寶永年代の旅日記、驛路の鈴が、池鯉鮒驛岡崎より三里八町○此所に昔は小家二三軒ありしが、近き頃茶屋となり今はかく果してなり侍る、と言つて驛と記したとこからすると寶永の近い前頃に宿驛と爲つたのであらう、今は人口約一萬と言はれ、商賣も可なり盛なやうだが、夫れは明治三十九年に附



昔の知立

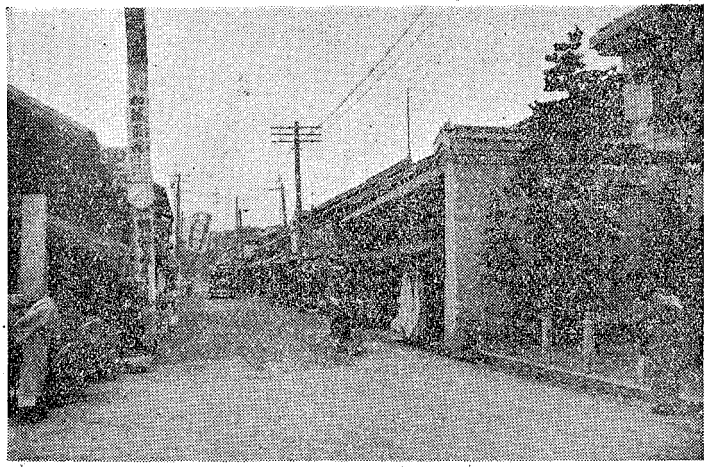
近の村落を合併して知立町を立てた勢であらう。

町を出ると十町程の間は近代道路に改良されてゐるが、夫れからの道路は線形は餘り悪くはないが路面は相變らず悪い、言はば使へるだけ使はれた凹凸の甚しい道で夫れは海道第一であらう。昔からの砂利道で固められた部分だから之を利用して簡易な鋪裝でもして呉れたら、どれ程旅人が喜ぶであらうかを考へても、矢張り財政に祟られて、夫れが出來得ないとふことだから、何となく悲しい。

路面の凹凸に惱まされながら行く程に、國道の左に戰國の亂を想ひ出さしめる今川義元の墓がある、義元の墓は少し小高く盛られてゐるが、義元の爲

に犧牲にされた諸將の墓は土饅頭の小さなものだ、併し永錄の頃、駿遠三の三國を統一し勝軍に誇つたのも束の間、信長の爲に敗られ、毛利が指を口に指し入れて、此處貧相な墓場に眠つてゐるかと言へば、何となく氣の毒だ。

古將軍の末路に同情して進む程に有松絞で名高い有松町、今は人口二千を持つて相當盛な町ぢやが、鳴海の宿驛近くに位して發展した町だから宿驛にも爲れ無かつた。併し天下に名を得た有松絞のお蔭で活氣がある。夫れは彌次喜多の言つたやうに欲しいもの有松染よ人の身の、あぶら絞りし途にかへても。で商賣が盛だからだ、今衰えてゐる昔の驛よりは悧巧だ。



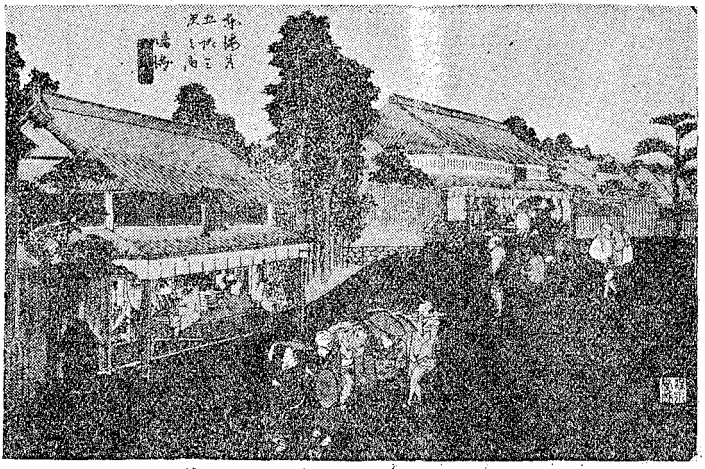
今の鳴海

## 鳴海

今は人口一萬と言はれてゐる鳴海町、有松町と競つて鳴海絞で有名な生產的の町だが、德川以前に言ひ囃された鳴海は此處では無かつた、今町の一部に屬してゐる古鳴海だつたのぢや、其處を成海といつたのだが平安朝の上期の頃から鳴海と言はれだし、其の鳴海は今とは違つて海濱にあつたものだ、更級日記は。尾張國鳴海浦を過ぐるに、夕潮たゞ滿ちにみちて、今宵宿らむも、ちうげんに潮みち來なば、こゝをも過ぎじとある限り惑ひ過ぎぬ。と言つてゐるから平安朝時代の鳴海は海邊に在つたのは事實だ、夫れは今の古鳴海が

海濱にあつたが漸次海邊が南の方へ擴張されて東海道も南へ移り、今の鳴海を構成するやうに爲つた、で當時の東海道は古鳴海から相原へ出てゐたものだ。

鳴海が宿驛と爲つたのはいつの頃か判らないが、東鑑、建久四年正月三品宗尊親王關東御下向休泊の條に正月二十三日丁未晝鳴海。と傳えてゐて、まだ當時は宿驛では無かつたらしいが、大乘院記錄に載せてゐる應仁二年二月十五日自二京都一至二鎌倉一宿次第。に鳴海とあるから、當時からの宿驛であつたことは事實だ、併し東海道が今の鳴海に變へられたのも亦明かではない、彌次喜多の連中が、天白川に架けられた田ばた橋を渡つて、笠寺觀音堂に參つてゐるから矢張り今の海道を通つたものだ、で德川時代に東海道と爲つたのであらう。



昔の鳴海

町から熱田に出る迄の間の道は、昔から隨分行旅の人に言ひ囃されてゐる、仁治年代の東關紀行や建治の十六夜日記でも此邊の潮干潟を見て思ひ想ひの感想を物語つてゐる。

故郷は日を經て遠くなるみ潟
いそぐ潮干のみちぞくるしき

併し東海道驛路の鈴は浦路を餘り語らないで、故郷にかはらぬものはすゞむしの、なるみの野邊の夕ぐれのこゑ。と詠んで、戸部から宮まで大かた家つゞく。と言つたが、今は天白川以西の部落が大名古屋市に編入されて名古屋市と爲つたお蔭か、縣廳の管理する道路よりは路面が良いのが特に眼につくのも皮肉だ。